連載

思い出の星空【2】

星のある風景を求めて

服部完治（名古屋市科学館）

いま、夜空には電灯の光があふれ、暗闇と星空が急速に失われつつある。しかし、人が自然の一部であるのならば、「夜」という自然現象の本来の姿もまた、決して忘れてはならないものだろう。星の輝きは宇宙の神秘を私たちに語りかけ、月の光は闇を蒼白く照らして人の感性をいたく刺激する。

失われゆく「夜」を少しでも記憶にとどめたい…そんな思いから、私は長年にわたって「星のある風景」を撮り続けてきた。

今回、編集長から仰せつかったエッセイのテーマは「思い出の星空」。であれば、私がこれまで撮影してきた写真の数々をご覧いただくのが良さそうに思われる。そこには、千夜一夜ごとの私の想いが、不完全ながらも写し込まれている。

とはいえ、主だった作品はweb上でご覧いただけるので（文末のURL参照）、ここでは、そういった写真をライフワークとするに至った道のりを主体に、いくつかの印象深い思い出を語らせていただくことにしたい。

1. 初めて満天の星を見たころ

星に興味を持ち、天文雑誌などを読み始めると、そのうち天体写真を撮ってみたくなる。ところが、天文少年にとってカメラや赤道儀はとても高価であり、おいそれと手が出ない。夜ごとカタログを眺めつつ「あのレンズは一段絞るだけでシャープな像になる」など、指をくわえて高嶺の花の品定め。それがまた結構楽しくもあり、あこがれはますます募っていく。私の場合もご多分に洩れず、このような少年時代を送ったクチだった。

ついに念願叶って一眼レフカメラを手にしたのは、高校1年の夏休み直前のことだった。同時に、レリーズ、レンズフード、三脚も買い揃えた。白い化粧箱を開けて自分のカメラを手にした時の歓びは、ちょっと言葉では言い表せない。さっそく、高校のクラブ（地学部天文班）の夏キャンプで、キスリングザックに詰めて山へ持っていったのである。

もう35年も前のことになるが、あのときの星空の美しさは、いまでもはっきりと覚えている。天の川がまるで濃い綿雲のようで、薄明で空が白んできてもまだ雲のように見えていた。山奥の満天の星を一晩じっくり眺めたのは生まれて初めてのこと。そして初めての天体写真。白黒フィルムを使った固定撮影である。強運にも、その12コマ目にかなり明るい流れ星が写ってくれた（図1）。

図1 初めての天体写真
愛知県鳳来町（1971.8.1）

そのフィルムは、初めて自分の手で現像し、引き伸ばした。半年ほど経ったころ、これを雑誌に応募したところ、またまた運良く入選して掲載された。（流星の写真は、出せば載ると言われていた時代のことである。）

こうなると、もはや病みつきである。それからはクラブの備品のポータブル赤道儀をなかば私物化して使い、やたら写真を撮りまくり、毎月せっせと雑誌に送り続けた。3〜4か月に1度くらいのペースで入選していたと思う。応募するために写真を撮るのだから動機がちょっと不純であるが、こんな時代が2年ほど続いた。

ひょんなことから18cm反射赤道儀を入手して、写真のパターンが変わった。望遠鏡が届いたのが高校卒業の1週間前のことで、予備校時代の1年間は、それまでの固定・星野ガイド撮影から、月・惑星・星雲星団へと対象が移った。予備校生という事情で撮影ペースは少々（汗）ダウンしたものの、この18cm反射はさすがに良く見え、良く写った。雑誌に応募した写真が、なんともあっけなく、必ず入選するのである。「どんな機材を持っているか」が大きくモノをいう時代だった。

タイミングが良かったのか悪かったのか…。もし自宅から通える大学を選んでいたら、きっとそれ以降も、この望遠鏡でバリバリ撮りまくっていたことだろう。しかし私は、親元を離れて下宿する道を選択した。

望遠鏡はさすがに大きすぎて下宿に持っていけない。手元に置けないひがみ根性からか、機材競争の空しさが目につくようになった。一度覚えた蜜の味は忘れがたく、機材を後戻りさせてまで続ける気にはなれなかった。

こうして、大学入学と同時に、私の天体写真遍歴は突然終わりを告げたのである。

＊　＊　＊

大学時代もたまに仲間と星を見に行ったが、そんな時、私は一人寝転がって星を見ることが多かった。ごくごくまれに、気まぐれにカメラを取り出しても、わざと電線や街灯を入れたり、雲の切れ目を入れた写真を撮って、「これこそ、人の生活や自然の息吹あふれる写真である。雑誌には載るはずないけど…」などとほざいていた。天体写真とみなされないヘンな星の写真ばかり撮る人間が一人くらいいてもいいではないか、とひねくれていたのである。

ある時、大学の天文同好会で新入生歓迎観望会を行うというので、すでに上級生になっていた私も久し振りについて行った。現地に着くと、さっそく後輩たちは望遠鏡を組み立て、ガイド撮影を開始した。新入生もほとんど経験者で、めいめい好きなように写真を撮り始めた。例によって私はカメラを取り出しもせず（カメラを常に持っていくのは悲しい習性である）、シートの上に寝転がって星を見ていた。

参加者のうち、女性は2年生が2名、新入生が3名で、カメラを持っていないのは彼女たちだけだった。5人でしばらく、流れ星が出たと言っては騒いでいたが、そのうちふと気になった私は、せっかくだからカメラを貸してあげようという気になった。それまで、大切な宝物であるカメラを人に貸すなどということは考えもしなかったので、当時としてはガラにもないことである。

ちょうど国産カラーフィルムが、それまでのR銘柄から、E6現像可能なクローム銘柄に変わったころだった。性能アップした新タイプのフィルムを詰め、固定撮影の方法をざっと説明すると、2年生の二人は目を輝かせ、三脚とカメラを抱えて暗がりへ出かけていった。3人の新入生はもう少し星座を覚えたいからと、私の横でまた早見盤を見ながらあれこれやり出した。

どの程度時間が経ったころだろうか。たまに星座を訊ねられると相づちを打っていた私に、何を思ったのか新入生の一人がポツリと言った。

「天文同好会に入っても、カメラを持ってないと、することがないんですね」

一瞬、ドキッとした。

星を見ることにロマンチックなあこがれを抱いて参加した彼女にとって、天文同好会はRがクロームに変わったとか、極望のない赤道儀はタダの台であるとか、訳の分からない言葉をしゃべる異様な集団に見えるというのである。

さすがにショックだった。

一人でぼけっと星を見ていた私に対しては本心が言えたのかもしれない。しかし私には自分の高校時代を非難されているような気がした。そしてそれは、当時の日本の天文アマチュアの集まりの多くについても言えることだったのではないだろうか。天体写真をやめた私もまた、それは雑誌投稿という目的を失ったための開き直りに過ぎず、自分なりの星を見る楽しみ、写真を撮る楽しみを見つけようなどとは思いもしなかったのである。

一体、これまで自分は何をやってきたのだろう…。郊外の中学校の校庭で見上げたあのときの星空は、新タイプのフィルムに刻まれた鮮やかな星の軌跡とは裏腹に、なんとも侘しいものになった。その心象風景は、その後も私の心の中で延々と尾を引き続け、それは現在の仕事に就いてからもしばらくは途切れることがなかった。

後年、ライフワークとして「星のある風景」を撮るようになったのは、このときのショックが要因の一つである。そればかりか、自分のプラネタリウムの解説スタイルを形づくってきたのも、民俗学や神話学に関心が移ったのも、たぶんこのことが大きく影響していると考えている。

2. ジャコビニ流星群

私と同世代の天文趣味人なら、1972年のジャコビニ流星群の、あの「世紀のカラ振り騒動」はよく覚えていることだろう。大流星雨出現の期待感で世間はかつて無いほど盛り上がり、社会現象とも言えるほどのブームを巻き起こした。当時高校2年生だった私も、大きな夢と期待を持って10月9日を待ち焦がれていた。流星が雨のように夜空を飛び交う夢を実際に何度か見たほどである。

高校のクラブでは、名古屋近郊の、私の家の近くの田んぼの真ん中で観測することに決めていた。それまでも月に1回は集まって、徹夜でたむろしていた馴染みの場所である。

ところが天文雑誌によると、過去の晴天率は東北北部が良いという。時刻表で調べてみると、8日（日）の朝に名古屋を出れば、新幹線～東北線の特急「はつかり」と乗り継いで、宵のうちに青森に着けることが分かった。

これは、いざとなったら行くしかない！

当然、月曜日の授業には出られないが、運動部が試合で公欠になるんだから地学部だって同じだろうと、学校に公欠願いを出したところ、あっさり却下。それどころか、いつもは勝手に集まっていたのを、このときだけは「集会願い」なるものを書かせられ、教師2名が朝まで付き添うことになった。とんだヤブヘビである。

それでも家族には「いざとなったらズル休みする」と宣言し、ほどなく運命の10月8日を迎えた。薄曇りだが、なんとかなりそうな気配である。早々に青森行き中止を決定し、夕食後、いつものようにリヤカーにポータブル赤道儀を積んで、クラブの仲間を駅まで迎えに行った。駅から2キロほどの道のりを、リヤカーを引いてゾロゾロと歩くのである。総勢10名ほどだったか…。そのうち2人の先生も車でやって来た。

だだっ広い田んぼの真ん中で、たまに交代で手動ガイドをしつつ、それ以外の時間は寝転がって空を眺め続けた。明るい星がちらほら見えるかどうかといった状態が朝まで続き、その間、散在流星がたった1つ流れただけだった。あのときの、ただただ眺め続けた薄曇りの夜空もまた、いまだに忘れられない思い

出である。それ以来、「流星雨を見ること」が私の生涯の夢となった。

【余話】

私と同世代のS氏というヒゲのおじさんも、この時、公欠にするしないで、学校当局とやりあったそうである。似た者どうし?（汗）

いつだったかの年会でそんな話をして、その後、1998年のしし群の前にtenkyo MLで「天文部にも甲子園大会を！」という話が盛り上がった。そこからスタートしたのが、現在の高校生天体観測ネットワーク（Astro-HS）である。

＊　＊　＊

ジャコビニ群の母彗星は約6年半の周期で公転しているため、地球は13年ごとに流星物質の固まりとぶつかる可能性があるとされている。しかし、あの世紀のカラ振り騒動の苦い経験のためか、13年後の1985年はほとんど話題にならなかった。

折りしも、名古屋大学で日本天文学会秋季年会が開催されていた。その日は夕刻から市内のビール工場直営店に日本の天文学者のほとんど（?）が参集し、懇親会が盛大に行われた。私もこの懇親会に駆り出され、それなりに極大を気にしつつも、ビールを呑んでいたのである。

夜遅く帰宅すると、新聞社から電話があったという。一体何事かと、折り返し馴染みの記者に電話を入れると、流星がいっぱい流れたとか、UFOじゃないかとか…??　イマイチ意味がよく分からないのだが、どうやらジャコビニ群が大出現したらしい。（冷汗）　天文学者のコメントを取るべくあちこち電話しまくっているが、誰もつかまらなくて困っているという。（そりゃそうだ。みんなでビール呑んでたんだから…。）

この年のジャコビニ群は夕刻にペルセウス群並みの突発的な出現があり、おまけにそこに人工衛星の落下が加わったため、情報が交錯していたのだった。人工衛星の落下は、流星観測中の愛知教育大学の学生のカメラがしっかり捉えていた。

このとき、懇親会をサボッて観測に出かけられたという国立天文台のK先生には、ずっと後にこのことを伺って、心底、感服させられた。来るべき1999年のしし群のときには二度と同じ徹は踏むまいと、固く心に誓ったのである。

＊　＊　＊

さらにその13年後の1998年。世間では夏ごろから「11月のしし座流星群が大出現するかも?」というううわさで持ちきりだった。それにつられてか、ジャコビニ群も多少は話題にのぼった。予想では、10月9日の明け方6時ごろ（日本では明るくなる直前の4時ごろ）がピークという。満月という悪条件とはいえ、これは万難を排しても見に行かねばならないだろう。

10月8日の夕刻、私は木曽開田高原の牧場で日没を眺めていた。形の良いナラの木が1本あり、それを前景にした写真をたまに撮っている場所である。天気は快晴で、御岳の背後に美しい夕焼けが見えた。まわりに人影はまったくない。とりあえずの偵察を終えて、いったん木曽福島に下りてラーメンを食べ、コンビニで夜食用のカップ雑炊を買い込んだ。

開田に戻る道すがら、車窓からいくつかの流れ星が見えた。まだ月が昇らない19時ごろのことである。牧場に到着し、まずは気を落ち着かせて、ゆっくり空を眺めることにした。経路の長い群流星がちらほら流れる。26年目にして初めての、念願のジャコビニ群とのご対面だった。感慨無量とはまさにこのことだろうと、あのころの思い出をかみしめながら、美しい星空にしばし見とれていた。

やがて月が昇ってきた。低感度のEPPをカメラに詰めて、とりあえず木と星の写真を撮りながら待機する。21時ころにはかなり流

れるようになったので、これはひょっとすると大流星雨になるかも?と、いやがうえにも期待は高まってくる。いつでも流星に狙いを変えられるように、予備のフィルムバックに高感度の E200 を詰めて準備し、アスファルトの道に座り込んで空を眺めていた。

あとから振り返ってみると、22 時前後がピークだったと思う。そのころにはペルセ群並みの出現になり、「これはあと 1 時間もするとすごいことになるかなぁ?」「もう少し流れるようになったらフィルムバックを交換しよう」などと思っているうちに、やがてピタッと流れなくなってしまった。

予報を信じて夜中から出かけ、まったく見られなかった人も多いと聞く。生涯の夢である「流星雨」にはほど遠かったが、見ることが出来ただけでも幸せな出来事だった。

3. ハレー彗星のもたらした転機

小学生のころ、ハレー彗星が 1986 年に帰ってくると何かで読んで、指折り数えてみた。その時、自分は 30 歳??? 小学生にとって 30 歳になった自分など想像できるはずもなく、それは遥か遠い未来の霧の中のようで、何とも奇妙な感覚を覚えたことがある。

しかし、少年老い易し。あこがれのハレー彗星は何ともあっさりとやって来た。(それどころか、あれからもう 20 年・・・・・・)

そのハレー彗星の到来が、その後の私のスタイルを決定づけるきっかけとなった。

ハレー彗星回帰の数年前、職場の友の会有志が集まって「B (バルブ) の会」というサークルができた。街中や、山や湖で、星空をふと見上げて感動したときのあのイメージを、風景とともに写真に写し込むことを目指していた。それにはどうすれば良いのか? 手本となるような写真は、まだ世の中にさほど存在しなかった。

当時の私は、学生時代のあのショックを未だ引きずっていたのだが、それでも被写体を求めてあちこち出かけていた。寺社、教会、遺跡、港、ビル街、枯れ木、桜、合掌造りなど、絵になりそうな風景を手当たりしだいに撮影した。地上をストロボ、懐中電灯、車のライトで照らしたり、色フィルターを使ったり、多重露出してみたりと、思いつくあらゆる方法を試していた。曇り空で星が一つしか見えてなくても、「それがありのままの自然の風景だ」と、お構いなしにシャッターを切った。かつて、自ら「雑誌に入選するはずのないヘンな写真」と呼んでいたたぐいの写真を人に勧め、自分でも撮り始めたのである。

試行錯誤の中で、半月の光を地上の照明に利用するのが一番好ましそうだと分かりかけたころのこと。幼いころから待ち焦がれていたハレー彗星がついにやって来た。

仕事がら、問い合わせの電話が毎日山のように掛かってきて、出かけるどころの騒ぎではない。それでも、前年のジャコビニ群の痛い経験がある。春分の日の前後に無理やり数日の休みを確保して、尻尾のあるハレー彗星は泣いても笑ってもこのとき限りと、晴れ間を求めて伊那谷へ出かけた。

リンゴ畑の傍らで眺めたハレー彗星は、高校時代に見たコホーテク彗星のようなイメージだった。かろうじて尾は見えるが、なんとも暗い。それでつい魔がさして、ガイド撮影を選択してしまったのである。

出来上がった写真は、彗星はそれなりに写ってはいたが、自分の撮りたかったイメージとはかけ離れたものだった。かつて固定で撮影したコホーテク彗星やウエスト彗星のほうが、地上の風景が写り込んで臨場感にあふれ、ずっと良いと思えるのである。そんな自分の嗜好はすでに分かっていたつもりだったのだが…。取り返しのつかない大失敗である。

「こんな中途半端なことをやっていてはダメだ。もうガイド撮影はきっぱり止めて、今

後は何があっても固定撮影だけでいこう。」

思い描いているような「星のある風景」が果たして本当に撮れるものなのかどうか、それすら定かではない状況での一大決心だった。そしてこの決意によって、やっと学生時代の呪縛から解放されたと自分では思っている。また、長らく中断していた山登りを再開するきっかけともなった。

就職して最初のボーナスで買ったポータブル赤道儀は、それ以後一度も使わないまま人手に渡り、18cm 反射鏡はハレー彗星の光を通したのを最後に、いまも物置の奥で眠ったままである。

自分のイメージにそこそこ近い写真が何とか撮れるようになるまでには、それからさらに3年ほどの修練を要した。「星のある風景」を目指してから足掛け7年にわたる長い修業時代の、ほぼ半ばの出来事だった。

＊　＊　＊

そのうち、暇さえあればカメラを担いで山に籠るようになった。昔のようなテントを担いでの強行軍は夢のまた夢。もっぱら小屋泊まりだが、再開からはや 18 年になり、いつのまにか山中 250 泊を超えてしまった。

北アルプスの稜線で、岩に座って一人ぼんやり風景を眺めていると、いつのまにか時が過ぎてしまう。目の前の自然はあまりに雄大で、自分がまわりに溶け込んでいくような感覚を覚える。これが何とも心地良い。

夜ともなれば、空には満天の星がきらめく。さっそく防寒具を着込んで、今度は夜の風景に浸るのだ。露出中、たいていはカメラの近くに座り込んで星空を眺めている。(たまに、夜食のラーメンを作ってたりもするが…。)

かつて、蚊に刺されながらガイド星を追った夜がある。回転するガス球の力学方程式を解いていたこともある。しかし私にとって、この「てっぺんで星を見る」というスタイルこそが、宇宙と対峙する最適の方法だったようだ。やはり自分は山が好きだったのだと、この歳になってしみじみと思う。

4. 成就した生涯の夢

2001 年 11 月 19 日は生涯忘れられない日となった。あの大流星雨を、皆さんはどこでご覧になっただろうか。

＊　＊　＊

それまでの3年間、「どこで見るのか?」と聞かれるたびに「天候次第で、青森から鹿児島までのどこか」と答えてきた私だが、この年はそれが「北海道から沖縄までのどこか」に変わった。

なんといっても最大の懸念は当日の天候である。候補地に石垣島と釧路を新たに加え、前日までの一週間は「ひまわり」の画像と航空機の空席状況(小牧 11 時 30 分発の石垣便、12 時 35 分発の釧路便)をにらむ毎日だった。

結局、17 日深夜の「ひまわり」赤外画像を見て北海道と沖縄は候補から外した。さらに 18 日の朝、飯田で見上げた素晴らしい青空に、立山室堂へ行くかどうか迷いつつも、予想天気図から判断してこれも避けることにした。弱い冬型の気圧配置で、私が第一候補地としていた伊那谷はまず大丈夫の状況だったが、15 時の「ひまわり」可視画像（図 2）では、冬型特有の雲が北アルプスを乗り越え、じわじわと広がりつつあった。

そこで、念には念を入れて、夜になってから安曇野まで偵察に出かけることにした。19 時の時点で松本盆地は完全に曇り。辰野あたりで雲が切れて、それより南は快晴だった。この状況なら、しらびそ高原まで南下する必要はないだろう。ということで、やっと第一候補地の大鹿村に落ち着いたのである。

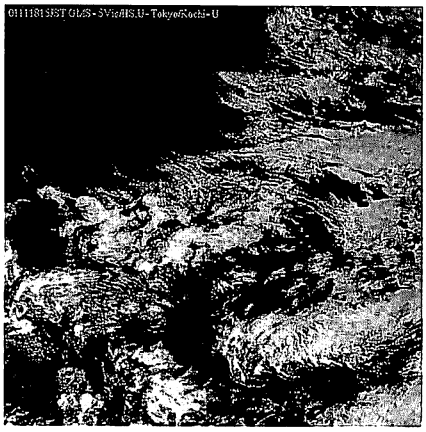


図2 「ひまわり」可視画像
(2001.11.18.15h)
高知大学気象情報頁
<http://weather.is.kochi-u.ac.jp/>

そこは、10年ほど前からしし群の候補地として想定していたところで、村の中心部からさらに林道を車で 40 分以上入った南アルプスの好展望地である。標高 1620m。3年前までは半分がダート（A級）の道だった。まさか他に来る人など誰もいないだろうと思っていたのだが、夜半過ぎに車が3台も来たのには驚いた。うち1台は練馬ナンバー！どうしてあんな場所を知っていたのだろう?(向こうも、名古屋ナンバーの私の車を見て、同じ事を思ったに違いないが…。)

23時少し前に現地に到着。撮影の準備をしていると、極めて長経路の流星が、ゆっくりとしたスピードで地平線に平行にいくつも流れるのが見えた。大気上層部をかすめる「アース・グレイザー」である。流星雨特有の現象と言われるのだが、その時の私はそんなことは完全に失念していて、そのミサイルのような不気味な雰囲気に、これから起こるかもしれない、ただならぬ天の異変の気配を感じていた。

その後の大出現については、ここで改めて述べるまでもないだろう。1時ごろには1999年の小ピークの出現数を超え、2時ごろにはわずか10分間で200個以上数えることができた。それ以降は、あまりに次々と流れるため、数えることが不可能な状況になったのである。撮影したフィルム（対角魚眼 F4.5、E200＋3、10 分露出）には、一コマで最高70個の流星が写り込んでいた。

＊　＊　＊

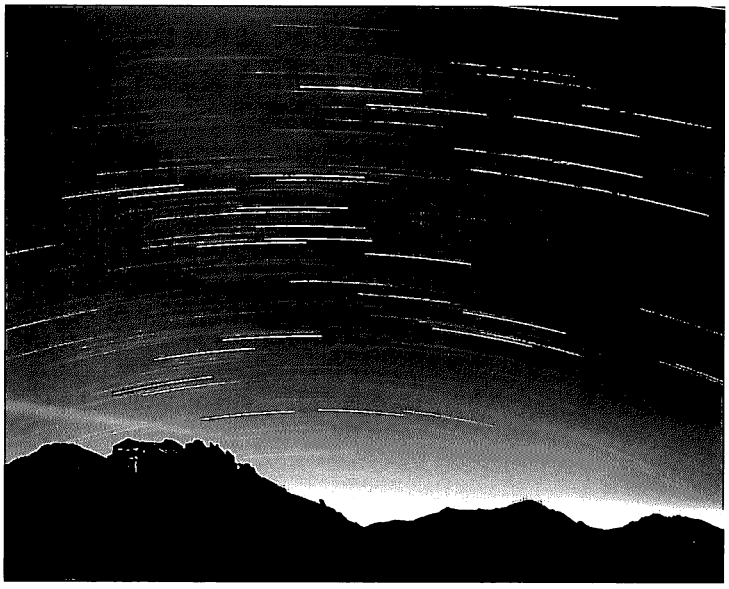
朝まで雲一つない天候のもと、空の暗さも視界の展望も最高に近い場所で、この「一生に一度」の体験ができたのは幸いだった。生涯の夢がついに成就し、このときばかりは、「これで、もういつ死んでもいい」としみじみと思ったのである。

そのせいかどうか、この日以降、それまで晴男だった私は雨男に変貌してしまったようである。ここ何年か新作がろくに増えていないのだが、それでも、長年にわたって撮り続けてきた写真の一部を整理して、昨年の 12 月に仲間とともにウェブで公開させていただいた。ぜひご覧いただき、ご感想をお寄せいただければ幸いである。(私は、いまのところ「匿名希望の Ha」で出展しています)

【ホームページ】 <http://wolf-net.jp/>

「明けの明星」
愛知県弥富町（1972.8.5）

天体写真に熱中していた若かりしころ、夜明けの情景のあまりの美しさに、ふとカメラを地平に向けた。自分としては当時一番のお気に入りの写真で、電線・アンテナ・雲を三悪とする旧来の風潮に疑問を持つきっかけとなった。



「星が飛ぶ」
燕岳（1994.10.28）

時間の矢が空間をつらぬいて飛んでいく。地球時計の振り子に合わせ、大気の壁をものともせずに飛んでいく。過去へ置き去りにされそうだ。時は流れている。しかし、流れているのは本当は森羅万象なのではないか。